

花田 良二

(埼玉県立小児医療センター 血液・腫瘍科)

岸本 宏志

(同 病理部)

小熊 栄二, 野澤久美子

(同 放射線科)

北野 良博, 五藤 周

(同 外科)

横紋筋肉腫は、新生児期の発症は約1%であり、非常に稀である。また、皮膚転移も非常に稀である。症例は、入院時に計13個の皮下腫瘍を認めた新生児期発症の横紋筋肉腫症例である。VAC療法に対して反応は良好であり治療継続中であるが、グレード3の高血圧を発症し苦慮している。本症例のように、新生児期発症で、皮膚に多発転移を示す症例群が報告されている。報告では極めて予後不良であり、今後の治療上の工夫が必要であると考え報告する。

7. 急速に心房内に浸潤する縦隔腫瘍に対し緊急的に心房内腫瘍摘出手術を施行した14歳女児例

遠藤 明史, 小野 敏明, 青木 由貴

磯田 健志, 高木 正稔, 長沢 正之

森尾 友宏, 水谷 修紀

(東京医科歯科大学 小児科)

症例は生来健康な14歳女児。H20年3月に上大静脈症候群で発症しCTにて縦隔腫瘍に気付かれた。その時点ですでに肺に転移を認めていた。腫瘍は急速に増大し上大静脈より右心房内に進展し、三尖弁に嵌頓の可能性が強く、緊急に開胸手術を行った。病理診断は形態、免疫染色では未分化で上皮性の腫瘍であったがSTY-FISH陽性で滑膜肉腫と診断された。術後の化学療法の反応は良好で現在治療に向けて治療を行っている。治療経過と文献的報告を述べる。

8. 神経芽腫の治療後5年の経過で発症した骨肉腫の1男児例

弦間 友紀, 大越 陽一, 吉野 浩

別所 文雄

(杏林大学小児科)

藤野 節, 藤岡 保範

(同 病理部)

本谷 啓太

(同 放射線科)

森井 健司, 望月 一男

(同 整形外科)

症例は7歳男児。既往に性腺機能障害と2歳4か月発症の神経芽腫(化学療法、自家末梢血幹細胞移植後)がある。神経芽腫の治療終了後5年の経過を経て、疼痛と歩行障害を主訴に左大腿骨遠位骨幹端部の骨肉腫を発症した。アルキル化剤やアントラサイクリンとの関連性、遺伝的素因などの発生機序を踏まえ、二次がんとしての骨肉腫を考える。

9. 非典型的免疫学的表現形(atypical immunophenotype)を認めたT-ALLの1男児例

村井 健美, 七野 浩之, 梁 尚之

平井麻衣子, 西川 英里, 陳 基明

麦島 秀雄

(日本大学医学部 小児科学系小児科学分野)

【背景】近年T細胞性ALL(T-ALL)の治療成績は向上してきたが、免疫学的抗原マーカーが非典型的なT-ALLの予後が不良である。

【症例】5歳男児。インド人。白血病を疑い入院。骨髄検査で有核細胞数30万/ μ l、芽球は98.2%、POX陰性、PAS陰性であった。免疫学的抗原マーカーはCyCD3, CD2, CD5, CD7が陽性、CD1a, CD8が陰性、CD13, CD34が陽性であった。T-ALL, High-High riskと診断しCCLSG ALL2004で治療したが強化療法中骨髄再発した。免疫学的抗原マーカーは診断時のパターンに加えCD33, HLA-DRが陽性であった。様々な化学療法行うも無効であった。

【考察】近年CD1a, CD8が陰性、CD117, CD34, HLADR, CD13, CD33等が陽性のT-ALLの予後は不良であると報告され、本症例も同様の特徴を示し、種々の化学療法に不応であった。